

日本のポピュラー音楽におけるジャンルの生成と変容に関する社会学的考察

—70年代のフォーク、ニューミュージックを中心として—

日本ポピュラー音楽学会会員

佛教大学大学院社会学研究科 平川裕司

<研究概要>

ポピュラー音楽の研究は、これまで音楽学、民俗学、社会学、社会心理学、歴史学などのさまざまな分野からアプローチが試みられている。ポピュラー音楽に言及した研究としては、フランクフルト学派の中心人物であるテオドール・W・アドルノによる批判的な論考がその先駆的なものとして知られている。

日本においてポピュラー音楽を社会学的な観点から考察した初期の代表的な研究としては見田宗介の『近代日本の心情の歴史—流行歌の社会心理史』(1967)を挙げることができる。この論考は明治から1960年代までの日本の流行歌451曲の歌詞を分析し、明治から昭和にいたる日本人の心情をそのときどきの流行歌から読み解いたものである。しかしながら、1980年代になると、流行歌の歌詞から大衆の思想や心理を読み解くというこれらの手法は困難になっていく。

このような背景を踏まえ、本論文では、1960年代にアメリカから上陸した自作自演を主体としたフォークという音楽ジャンルが日本において受容され、発展し、変容していく過程(日本ではやがてニューミュージックと呼ばれるようになる。)について、ポピュラー音楽の研究者であるブライアン・ロングハーストが彼の著書『Popular Music & Society』(1995)で提示しているポピュラー音楽を分析する際に重要となる Production (音楽制作者)—Text (作品)—Audience (聴衆) の分析フレームのうち、これまで日本における研究例としては少ない Audience (聴衆) の視点から分析を行うものである。

分析に際しては、当時、フォーク、ニューミュージック知るうえで貴重な情報源であった音楽雑誌『新譜ジャーナル』(1969~1990)の読者投稿欄を使用し、当時の Audience (聴衆) の生の声を分析することにより、日本においてフォークという音楽ジャンルがニューミュージックへと変容していく過程を明らかにすることを目的とする。

本論文の構成は、次のとおりである。第1章では、日本のポピュラー音楽における先行研究について紹介するとともに、聴衆者の視点から音楽雑誌の投稿欄分析を行うことの有効性について考察する。第2章では、日本のポピュラー音楽において、流行歌が生まれ、やがてフォーク、ニューミュージックが流行するまでの歴史について評論家などの言説から考察を行う。第3章では、ポピュラー音楽において音楽雑誌が果たした役割について明らかにする。第4章においては、音楽雑誌「新譜ジャーナル」の読者投稿欄からフォークというジャンルの変容について、聴衆者の視点からの分析を行う。最終章では、日本のポピュラー音楽の歴史において、フォークという音楽ジャンルがどのように受容され、どのようにニューミュージックへと変容していったのか、その過程について聴衆者の視点からの分析結果を踏まえ、それらの全容を明らかにする。

以上

